■全米を大ヒットで飾る恋の情熱！
アカデミー賞〈ゴルディー・ホーン〉
ゴールデン・グローブ賞〈エドワード・アルバート〉
に輝くフレッシュコンビが
あなたに永遠の感動を
捧げます!!

ゴルディー・ホーン
エドワード・アルバート
本年度アカデミー賞助演女優賞受賞
アイリン・ヘッカート

たとえ青い空が
見えなくとも…
美しいあなたの顔が
見えずとも…
私の瞳に輝く
このすばらしい〈愛〉！

■カラー作品■

バタフライはフリー

BUTTERFLIES ARE FREE

監督ミルトン・カトセラス／製作M・J・フランコビッチ／主題歌「バタフライはフリー」エドワード・アルバート／コロムビア映画

＊スタッフ

製作……M・J・フランコビッチ
監督……ミルトン・カトセラス
音楽……ボブ・アルシバー

＊キャスト

ジル……ゴルディー・ホーン
ドン……エドワード・アルバート
ベイカー夫人……アイリーン・ヘッカート
ラルフ……マイケル・グレイザー
ロイ……マイク・ウォーレン

バタフライはフリー

BUTTERFLIES ARE FREE

＊かいせつ

サンフランシスコの安アパート。たまたま隣り合わせになった青年と女の子が恋におちた。青年は盲目。だが二人には何の障害にもならない。性格も行動も違う二人だが、楽しい愛の交換がはじめられる。

青年はひとりっ子。父をはやく失い、童話作家の母の手で育てられてきた。そして属するところは上流階級。母親は息子が生まれも育ちも粗野なヒッピーまがいの女の子とつきあっているのを知り、びっくりぎょうてん。二人の関係を許すことなど、まったくできない。三者の間に気まづいいさかいが起きてきた……。

この作品はブロードウエイで大ヒットした同名の舞台劇を映画化したもので、監督のミルトン・カトセラスは舞台での同作の演出を手がけている。映画はこれがデビュー作。二人の愛の姿をユーモアこめて暖かく描き、さわやかなラブ・ストーリーに仕上げている。

主演は「サボテンの花」や「バンクジャック」でおなじみの、キュートなスター、ゴルディー・ホーンと新人のエドワード・アルバート。盲目の青年に扮するエドワード・アルバートは名優エディ・アルバートとマーゴの息子。一二〇人もの応募者のなかから、いきなり主役に抜てきされた幸運な新人だが、血すじは争えず、新人とは思えない確実な演技を示して72年度ゴールデン・グローブ賞最優秀新人賞を獲得した。

青年の母親を演じているのはアイリーン・ヘッカート。わき役としてヘッカートは25年のキャリアをもつベテラン。この作品で72年度アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞した。（上映時間一時間49分）

＊ものがたり

その日、ジル（ゴルディー・ホーン）はサンフランシスコの安アパートに引越してきた。着がえをはじめて、窓ごしにふと隣を見ると、じっとこちらを見つめている男がいる。

ジルはパンティーとブラジャーだけ。合図を送っても相手は何の反応もしめさなかった。

ジルはそのまま奥にはいってしまったが、その男の魅力的な顔だちは、すでにジルの心をとらえていた。

翌日、隣室にコーヒーをもらいにいったことからジルはその青年と言葉をかわすようになった。青年の名はドン（エドワード・アルバート）。作詩と作曲で売り出そうとしているドンと俳優志望のジル。二人はまちまち気が合った。

話しをしているうちにジルは妙なことに気づいた。ドンがタバコの灰をテーブルの上に落としているのだ。

「テーブルが灰皿のかわりなの？」

「灰皿がそこに無いんだね。ぼくは目が見えはいんだ」

「あなた、めくらなの？」

ドンは生まれつきの全盲だった。だが、杖一本でどこにも歩いて行くことができる。室内の物はすべておぼえており、少しも不自由しなかった。はやく父を失い、母の手で育てられたドンは二か月間はお互いに絶対訪問し合わないという条件づきで独立生活の実験にはいったのだった。

ドンはギターを弾きながら自分の歌をきかせた。その美しいメロディーと詩はジルを感動させずにはおかなかった。

その夜、二人はごく自然に愛し合いベッドをともにした。

翌朝、二人のいる部屋に一人の婦人がはいってきた。ドンの母ベイカー夫人（アイリーン・ヘッカート）だった。パンティーとブラジャーのジルはあわてて隠れたが、遅かった。

二か月間という約束はあったが、夫人は不安でたまらなかったのだ。不安は的中した。

もう変な女の子にひっかかっている。すぐ息子を家に戻さねば、どんなことになるかわからない。

ドンは約束を破ったことだけでなく、初対面の恋人に無作法な母にものすごく腹が立ってきた。

ジルはこれから劇団のテストを受けるといって出ていった。夫人はそのジルを車で送るといって強引についてきた。車の中で二人はまったく対立してしまった。夫人はドンと別れなさいと強硬にいう。だがジルは夫人こそドンと離れるべきだと叫んで車をおりていった。ジルは涙を流していた。そしてドンと別れることを決めていた。

その晩、ジルは一人の男をつれてドンの部屋にやってきた。ジルはその男と一緒に暮すことにしたといい出した。そして、すぐ荷物をまとめて、アパートを出ていってしまった。

ドンは悲しかった。つづいて、からだじゅうから怒りがわいてきた。手当りしだい物を放り投げ、感情を爆発させた。しかし、悲しみはますます深くなっていった。

涙にくれて、ひとり座っていると誰かが部屋にはいってきた。ジルだった。

ドンに嘘をついても自分の心をだますことはできなかったのだ。

コロムビア映画

近日ロード・ショウ　ヒビヤ みゆき座